

2020年1月19日(日)／説教者：國分美生

説教：「神が与えた命と使命」

聖書：創世記2:4b～25

神は土の塵をこね、人の形を造り、鼻から神ご自身の息を吹き込みました。「人はこうして生きる者となった」。神は人間がその命を繋いでいくことのできるように、食べるに良いものをもたらしてくれる木もたくさん茂らせました。水も豊かにありました。神はエデンの園を守り、管理し、目を配るようと人間にミッション(使命)を与えられました。神はご自分が自由自在に操ることのできる人形のようなもとして人間を造りませんでした。神が人間を尊い存在として認めておられるからです。

創世記が編纂される数百年も前に、すでにバビロニアには天地創造の神話「エヌマ・エリシュ」が完成していました。創世記と似た部分もありますが、人間の生まれ方が創世記とは全く真逆です。「エヌマ・エリシュ」ではバビロニア国家神マルドゥクに逆らった悪い神が殺され、その血から人間を造り、そうして神々は労働から解放されたといえます。バビロニアの中心にマルドゥク神が据えられ、人間は神々への奉仕のために存在している、ということ強調する物語がバビロニアの創造神話です。イスラエルもこのバビロニアの世界観から影響を受けた部分もありました。しかしイスラエルは、神はご自分が創造した者たちを暴力的に抑え込み、力で支配するのではなく、尊い存在としてご自分に向き合う者として創造されたことを信じました。

もう一つ人間と人間の関係について描かれています。神は助け手を与えるため、人を深く眠らせ、そのあばら骨をとり、そこからもう一人の人間を造り上げました。この記述は長いキリスト教の歴史の中で、男性が女性より優位であることを意味していると考えられてきました。たしかにここでの言い回しは、当時の男性中心社会の、女性に対する見方が反映されています。経済的に余裕のある男性は、何人もの妻を所有していた時代です。そのような世の習慣に対して聖書は、優位に立った方の者が相手を所有し支配するのではなく、向き合って支え合う者同士としての人間を神は造られたということを主張します。

創世記の記述から、神は人間をいかに尊い、大切な存在として造ったかが見えてきます。神はご自分との関係、人間同士の関係を祝福して、人間をこの世に生み出しました。私たちは、神の愛の息吹を吹き込まれ、生き、そして神の創造した世界の秩序を守る使命を与えられています。(國分美生)